

マニラ麻に就て

神港高等学校 井田五郎

南洋廳熱帯産業研究所ボナベ支所に在勤の当時、ボナベ島キナーの大酋長で、南洋群島一の財産家、ナンペーの家に数日間滞在した。そのある日、ナンペー所有の大椰子林の中を、彼と三人で歩いた。その椰子林の中には、約五百頭の豚が放つてある。一頭の交つた豚を見つけ、その後について行つた。その内に数株の芭蕉を見た。然しそれは芭蕉でなくマニラ麻即ち、アバカ、和名イトバセウの一品種であつた。このカロリン諸島の島々を歩いたが、ボナベ島に於て、ここで始めて見たので、それが自生したものか、誰かが栽植したものを、ナンペーに尋ねたが、彼は知らないと言ふ。そこでナンペーに交渉して、その株を全部譲り受けて、顧問を委嘱されて居た南洋パルパ株式会社^{Palpa}の農場に製紙原料として試作することにした。

この植物の栽培には、濕氣の多い、一ケ年中雨量が平等で、暴風のない熱帯地が良く、寒冷の土地では出ないと言ふことになつて居る。しかし濕氣を要するとはいえ、排水の悪い土地では、根を腐らす憂がある。土質は腐植土に富む土壤が最も良いのである。繁殖は、種子、分蘖、根の切断などによつて、行はれる。繊維の收穫は三十ヶ月乃至三ケ年で、初めて得られるので、それは葉身、葉柄及莖幹より採取するが、多くは莖幹からである。その繊維は殆ど絹糸のよに見える。元來はフィリッピン群島の特有産物で、同地の輸出品中第一位を占め、全輸出額の四割五分に相当する。フィリッピンの外、前述の南洋群島カロリン諸島(ボナベ島)のもの、又ヤツブ島、パオ島にあるもの、及び台湾の紅頭嶼に産するものもこれと同一のものであると思ふ。

芭蕉科に属する植物であるが、金平亮三博士は薑科のものとして記載せられて居る。学名は *Musa textilis* Née. で英名は Manila hemp. 又は, Abaca. 和名イトバセウとも云い、多年生の草本で、バセウに似て居るが葉質が強韌である。高は、5—1.0米で、一根株から、10—30以上の莖幹を出る。莖幹は、即ち、葉鞘で、円筒状をして居る。その高さは3—7米で色は暗紫色、又は、緑色をして居る、葉は長楕円形で基部が三角形になつて居る。葉の表面は、深緑色で、裏面は、灰白色である。又、葉柄は、長さ30—100糎で、花は花軸に沿うて叢生して、果実は緑色で、長さ10糎徑3—5糎の長楕円状の三角形であるが、食用にはならない。又黒色の大きな種子がある。

アバカとバセウの外部の差異は、次の通りである。

アバカ

- 一、草丈は小で莖は細長く暗色である。
- 二、葉柄は淡緑色。

バセウ

- 一、草丈は大で莖は太く淺緑色である。
- 二、葉柄は灰色。

三、葉の中肋の右に之れと平行の褐色の線がある。

三、同上のような線がない。

四、葉身が狭長で暗緑色をして先端が鋭く尖つて居る。

四、葉の先端が鋭く尖つて居ない。

アバカの品種は非常に多く、又全く同一の品種で、地方によつて、名称の異なるものもある。

この莖幹から取る繊維は粗剛であるが、長くで耐水性に富み、強力が強大であるから、船舶用網に用い、又眞田を編む、近時紙の原料にもするので前記の如く、数株を手に入れることが出来たから南洋パル株式会社農場に試作したが、栽植後約一年で稍成長した時に、同地を去つて、内地に帰つて来た爲、充分の成績も見ず、又全島は空襲を受け、引き続いて占領せられ、会社も解散したから繊維の採取にも至らず、多分今頃は荒地に野生の状態で残つて居ることかと思う。

汀の貝殻について

神戸市立楠丘高校 安藤保二

地質学の講義でこんなことを聞いた、「地層が垂直に立つ場合に如何にして上下を知るか、その時は化石の貝の向き方が一つの根據になる、つまり貝殻が汀に打上つて堆積する場合は下向きが多い」と云うのである。

右の説について納得の行かぬ点があるので之れる試めして見た。貝はサルボウで採集は前夜に風波の高い早朝を選た、大体百米の間の汀線で採集記録した、データは次の通り

第1回、堺市助松海岸(7.30.1948) 上向119個, 46.12%, 下向139個, 53.88%

第2回、洲本市大浜海岸(8.11.1948) 上向92個, 41.82%, 下向128個, 58.18%

上の様に前説は幾分、当を得て下向きが稍々多い、然し全然貝は下向きに堆積することは無謀であろう。従つて貝の向き方で地層の正逆を論ずる事は不可能である。上はサルボウと云う一種の貝に就いてであり、たゞ2回の調査である故更に再調査を必要とするが諸賢の叱正を待つ。(8.25.1948)